『創元会創設の父』

中野和高先生の偉業の考察

調査研究係　青沼　美智子

1　プロローグ

Gleam of Light－一筋の閃光。宮城県美術館で中野和高先生の作品「少女」（1963）写真①と初めて出会った時、強い光に打たれた思いがした。その少女は美術館の収蔵庫に整然と並ぶ夥しい作品群の中で、瞳から強い光を放ち毅然とした表情で輝いていた。

2007年新設の国立新美術館で各団体の先陣を切って第六十六回創元展が開催された。それを記念し創元会の会員として活躍し、会の発展に尽くされた先生方の特別展が同時に行われたのである。会の創始者の一人として多大なる貢献をされた中野先生の作品を特別展に展示させて頂くべく私は宮城県美術館に赴いたのであった。

重要な作品を自ら確認し拝借するという重責と共に、初めて入る収蔵庫の乾いた匂いが今でも強く思い出される。そんな私の緊張を見据えるような強い表情で「少女」は現れたのだった。先生の描く女性像は1927年に第八回帝展で特選となった「婦人座像」を初めとして、人物が量塊として描かれ、見ている者に迫って来る様に感じられる。

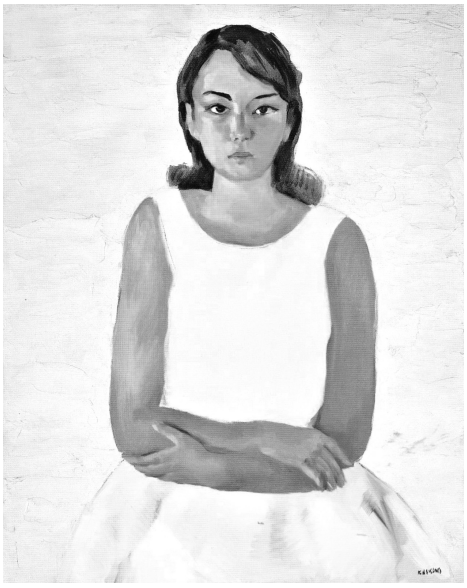
2　時代背景と歴史

中野和高先生は明治29年愛媛県大洲に生まれた。18歳の時東京美術学校入学のため、牧師であった父の赴任地の仙台から上京し、黒田清輝の指導を受ける。大正5年美術学校に入学、同窓に後に共に創元会を創設する鈴木千久馬先生、後に無二の親友となる前田寛治等がいた。

卒業後渡欧し、佐伯祐三、里見勝蔵等と親交を深める。帰国後帝展で連続特選、無鑑査となり帝国美術学校教授を経て、昭和16年鈴木先生等と共に創元会を設立した。

「僕はまた一方、新しい研究団体をつくって互に励まし合い度いと思ったので、（中略）同世代の鈴木千久馬、佐竹徳等の諸氏と倶に創元会を創設した。」と「造形・作家の言葉」の中で語っている。昭和33年芸術院賞を受賞し、同年日展評議員となる。

「父の生涯を顧みるとその画業の大半は創元会にあった事が痛感されます。」とご子息の和明氏が語って



①「少女」（1963）

②「婦人座像」（1927）

いる通り、会の創立、そして第四回展からの4月会期実現への尽力等々その功績は枚挙に暇がない。そして昭和40年に68歳で急逝されるまで数多くの素晴らしい作品を生み出し会の発展に尽くしたのである。

中野先生が上京した大正3年に勃発した第一次世界大戦は日本経済へ好況をもたらし、先生初め里見、前田、佐伯等数多くの若い画家たちが大正リベラリズムの自由な雰囲気の中でセザンヌ、ゴッホ、ゴーギャン、ルノアール、マチス等に憧れ渡欧する。しかしパリではこれらの後期印象派の巨匠たちは既に過去の栄光となり、フォービズムやキュビズムが終息後、グローバルな個性を反映し、独自の表現を展開するエコール・ド・パリの時代へと変遷していた。中野先生を始めとする日本の若い画家たちは、ドラン、ヴラマンク、ルオー、ブラック、モディリアニ等の影響を受けながらそれぞれの画風を形成していったと考えられる。

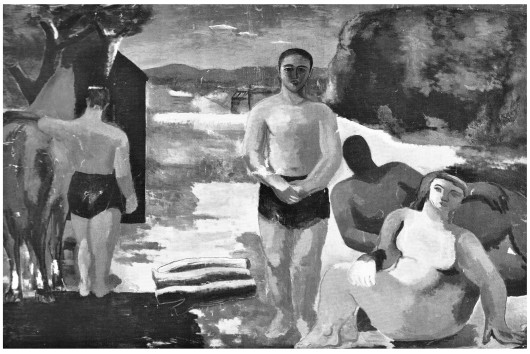
先生は特に、ドランやピカソの作品を評価していたと言われている。「彼はフランスの画家を師匠としては交わらなかったが、ドランとピカソのネオロマンチックな作品を非常に愛した。敏感と聡明な彼は他の人の画に影響される事はなく適度に自己を保育した。追求と努力は目覚ましかった。」と里見勝蔵が「巴里に於ける中野君」の中で語っている。

3 作品

中野先生の作品においては人物像、群像、風景が主要なテーマとして考えられる。

1927年パリから帰国すると第八回帝展に**「婦人座像」写真②**を出品し特選となる。哀愁の漂うこの作品は「前田寛治が、人物の気品、色調、筆触の新しい感覚を褒めた作品でコローの影響も感じられる。」と評されている。**（注1）**同時に出品した**「青衣の女」③**と見比べると同じモデルである事がわかるが、描き方は異なり、画家の関心は人物の表情や性格を表す事に向けられてはおらず、形体の単純化や色彩の対照、統一等の造形上の問題に向けられ、それぞれ異なった構図と色調で描き分けようとしている事に気づく。**（注2）**後の作品に多く見られるような、形体の単純化を敢えて同

④「風景を配せる我家庭」（1928）



⑤「無　題」（1930）

じモチーフで試しているようにも感じられる。

この代表作「婦人座像」に描かれた顔は無表情であり、作家の関心は人物の表情ではなく頭や身体全体の量感などにあると考えられる。**（注3）** 先生は人物画の研究を滞欧中の目的としていたが、これらの作品から人物の表情よりも形体の量感を表現する事を目指していた事が見て取れる。先生の描く人物は「形体を大きな色彩の量塊としてとらえており、荒い筆触による色彩相互の関係において空間の奥行や人体の量感が表されている。」と宮城県美術館の酒井氏が「中野和高とその時代」の中で述べている。先生は帰国後帝展等にそれらを体現した作品を発表してその真価を問おうとしていたのである。

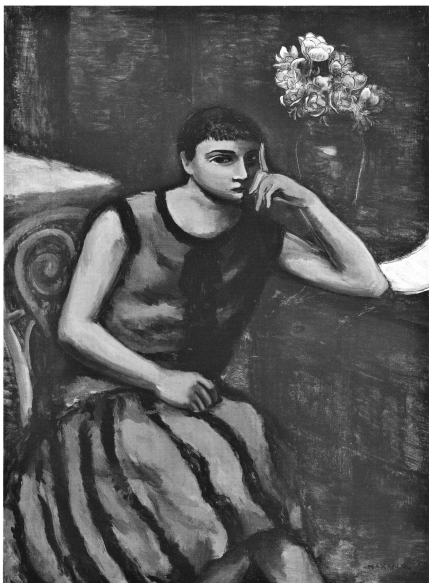
その後作品のテーマに変化が見られる。人物作品から群像作品へと変わっていくのである。九回展では群像作品**「風景を配せる我家庭」写真④**を出品し、翌年再び群像を描いた「聴音」を出品し、3回連続して特選を獲得し審査員となる。両作品共家庭生活の一コマが描かれていて、留学の成果を世に問う大作であった。その画面構成や色彩表現は高く評価され、日本洋画界の新しい潮流を担う作家として注目された。この2作品に加えて、**「無題」写真⑤**「少憩」と4年連続して群像作品を出品し作品のテーマは個人の人物から群像へと変貌を遂げる。

この変化の理由については、帝展の会場にふさわしい大きさと内容のために大画面という新しい課題に取り組んだものと思われる。「少憩」は家族の群像で、前景に多くの人物を配して複雑な人物の構成となっており後景に広々とした眺望を描いており、大画面の中で人物と風景を融合しようという試みが見られる。

「無題」では個々の人物を性格の描写ではなく量塊としてとらえ、それらの組み立てによって大画面を構成している。「聴音」もデフォルメされた人物の組み合わせだが、統制の効いた色調が画面の緊密なまとまりを高めている。**（注4）**

4　仙台との繋がりと信仰

中野先生は牧師であった父高弥氏について、「米国留学後、明治35年から長く仙台で布教に努めた。東北大凶作の際には仙台育児院を開設したりして80才の高齢に至るまで、その院長として生涯をクリスト教のために捧げたのであった。」と「作家の言葉」の中で述べている。「少女



③「卓に寄れる婦人（青衣の女）」（1927）

⑥「少女」（1957）

像」は先生がその生涯を通して手掛けた主題であるが、特に芸術院賞に輝いた１９５７年の**「少女」写真⑥**は、ベールを被り、手に聖書を握りしめた清楚な姿に「僕自身もまた至上の神にかしずく信仰の人となっている。」と語った自身の信仰を感じさせる作品といえる。

先生は旧制仙台第一中学校卒業後上京するまでを仙台で過ごしている。創元会記念展出品のため、作品をお借りした宮城県美術館にも先生の多くの作品が所蔵されており、節目節目に特別展が開催されてきた。

愛媛県に生まれ、宮城県に育った中野先生に因む展覧会として、１９８７年には両県美術館で「中野和高とその時代」が開催された。その図録には70点もの作品が掲載されている。

２０１９年には、「宮城県美術館特別展ーコレクション再発見　東北の作家たち」と銘打ち、宮城県の美術振興に貢献した中野先生の「赤衣の女」「婦人座像」「無題」が並べて展示された。「三つの作品からは、キュビズムから写実的な表現に戻ったピカソを的確に受容し、日本、そして宮城に伝えようとする作者の静かな熱意が伝わってきます。」と学芸部長の和田氏が述べている。

先生は又、昭和5年に地元の画家達と第1回東北美術展覧会を開催して審査員を務め、今日の公募展、河北美術展の母胎を作るのに大きな功績があった。

5　エピローグ

中野先生逝去の翌年１９６６年に東京都美術館主催で「中野和高回顧展」が開催された。鈴木千久馬先生が「回顧展に寄せて」と題して次の様に述べている。「中野君は返す返すも惜しいことをした。こんなに早く逝かれるとは夢にも思わなかった。全く世の無常を痛切に感じている。（略）」これは、中野先生の芸術院会員内定を心から喜んでいた鈴木先生の無念の言葉である。

最後に、この拙文の資料の多くは、先生の作品をお借りした宮城県美術館の図録「中野和高とその時代」を参考にさせて頂いた。

また、作品をお借りした経緯から知己を得て、中野和高先生と同様にその人間性の素晴らしさを以って尊敬申し上げる、ご子息、中野和明先生に多大なるご協力を頂いた事を感謝申し上げ追記と致します。

以　上

◎参考文献

＊「中野和高とその時代」図録（1987）宮城県美術館・愛媛県立美術館
注１・４「中野和高とその時代」有川幾夫
注２「中野和高とその時代」酒井哲朗
注３「1930年協会と中野和高」和田浩一
＊「中野和高回顧展」図録（1966）東京都美術館
＊第66回創元展国立新美術館公募団体初陣記念特別企画「物故作家選抜作品集」（2007）
＊60周年記念創元展「草創期の画家たち」（2001）